OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	拒否する女たち ： 宇治三姉妹の考察
Author(s)	渡會, 敦幸
Citation	詞林. 1991, 9, p. 10-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

拒否する女たち
―宇治三姉妹の考察―

渡會　敦幸

第一章　思念する女・大君に関する考察

一

宇治大君の結婚拒否にこれといった明確な動機がない、というのは、かつて指摘したところである(1)。結婚拒否と、拒否を貫徹させるための死は、既定の条件であり、その予定された物語の展開からの要求によって、大君の人物像は、些か矛盾対立する性質を合わせ持つ結果となってしまっているのであった。これは、八宮の人物像が、浮舟登場の新構想(2)により、橋姫巻と宿木巻とで矛盾を来しているのと、同様である。また、物語の展開上引き起こされる矛盾不整合は、大君の人物設定に限らず、ほかにもいくつか見出すことができる(3)。結婚拒否は、作者にとってきわめて重要な課題であり、多くの矛盾不整合を犯してまでも描く必要があったのである。それが物語に必須の要件であったことは、宇治十帖を通して、繰り返し語られるのによっても首肯される。ことは大君の問題だけに留まらず、中君、そして浮舟へと引き継がれていく。

二

いくつもの動機が列挙されながら、大君の結婚拒否には、なぜ、これといった納得し得る明確な動機が見出せないのであろうか。これに関しては、すでに多くの先学が指摘しているように、紫上が具体的苦悩の体験から得た想いを、大君が、自己の体験なしに、そのまま観念だけ自明のものとして継承してしまった所為であるといえる。若菜下巻の、

あまり年積りなば、その御心ばへも、つひに衰へなん。さらむ世を見果てぬさきに、心とそむきにしがなと、たゆみなくおぼしわたれど、さかしきやうにやおぼさむと、つゝまれて、はかゞしくもきこえ給はず。（三―三三五）(4)

とある紫上の思い・態度が、総角巻での大君の、

かう、おろかならず見ゆめる心ばへの、見劣りして、我も人も見えんが、心安からず、憂かるべきこと。もし、命、しひてとまらば、病にことつけて、かたちをも變へてん。（中略）と、思ひしみ給ひて、とあるにても、かゝるにても、いかで、この思ふこととしてんと思すを、さまでさかしきことは、えうち出で給はで（四―四五九）

という思念・態度に、そのまま重なっているところに、それは端的に表れている。それゆえ、源氏物語の流れの中でならばまだしも、大君の物語として、或いは大君の「個」の問題としては、実体験のない―謂わば裏付けのない、拒否の観念だけが、空回りしている感が拭えないのである。要するに彼女の結婚拒否の動機は、紫上の苦悩であって、彼女自身の内には存在しないのである。

三

ところで、結婚拒否の物語・女君は、宇治十帖大君によって初めて源氏物語中に登場するのではなく、すでに正篇中にも幾度か描出されていた。無論正篇中で光源氏を拒否し続けた「拒否する女」といえば、空蝉、朝顔などが、まず想起されよう。その空蝉の物語を内包する帚木三帖を充分に意識した上で、宇治十帖は描かれているのである(5)。確かに宇治の姫君達の境遇は、帚木巻で左馬の頭が、

もとは、やんごとなきすぢなれど、世に經るたづきすくなく、時世うつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わろびたる事ども、出で來るわざなめれば（一―六〇）

と規定した中の品に、まさしく符合する。また、橋姫巻での、

さて、その、ありけん返事は、などか、見せ給はざりし。まろ（匂）ならましかばと、うらみ給ふ。（薫）さかし。いと、さまざまかめる端をだに、見せさせ給はぬ。（四―三二六）

との薫・匂二人のやりとりは、帚木巻巻頭の頭の中将・光源氏間の、

色〳〵の紙なる文どもを、ひき出でゝ、中將、わりなくゆかしがれば（中略）（光）そこ（中将）にこそ、多く集へ給ふらめ。すこし見ばや。さてなん、この厨子も心よく開くべき（一―五六、五七）

という会話と重なる。さらに、今西祐一郎氏も指摘する如く(6)、引用のやりとりの後に繰り広げられる薫・匂二人の、山里に思いがけず見出される中の品の女性についての会話は、今引用した中将・光間の会話に端を発する、雨夜の品定と同趣向であり、それらの対話は、以後光や匂が中の品の女性と関わりを持っていく契機として、同一の役割を果たしている。そして、後述する夕顔物語と浮舟物語の類似を別として、最も明確に、

宇治十帖が帚木三帖を念頭に置いて語られている証左として挙げられるのは、忍び込む薫の気配を感じた大君が、中君を残して逃げてしまう、例の身代わり花嫁の局面である。ここでことさら言及するまでもなく、空蝉が軒端荻を残して光源氏から逃れた場面は、空蝉という巻名や人物名の示す如く(7)、空蝉物語中第一の眼目となっている。その場面を、作者が無意識に繰り返している、と考える方が、むしろ不自然であろう。軒端荻、中君に対する光、薫の対応は、それぞれ異なっているのではあるが、夕顔巻には、

うらもなく、待ち聞え顔なる片つ方の人（軒端荻）を、あはれと思さぬにしもあらねど、つれなくて、聞き居たらむ事の、はづかしければ、まづこなた（空蝉）の心、みはてゝと思す程に（一―一三〇）

とあり、一方総角巻には、「猶、つれなき人（大君）の御氣色、いま一度、見はてむの心に、思いのどめつゝ（四―四〇七）」という薫の、中君と何事もなく一夜を過ごした後の心内語があって、両者まったく正反対の反応をしめした、とはいえないのである。先程も触れたように、浮舟物語に関しては、第三章で述べることになるが、今みた如く宇治十帖は帚木三帖の強い影響の下に、展開する。そしてそれは、宇治の姉妹も空蝉も、「拒否する女」であることと、無関係とは思われない。作者が、続篇において紫上の苦悩を承けた、「拒否する女」を描き出す構想をたてた時、正篇中の「拒否する女」を意識するのは、自然である。如上の帚木三帖と宇治十帖の関係を合わせ考えれば、両者が無関係に描かれていると推定する方が、不自然なのではなかろうか。「女（空蝉）は、さこそ、忘れ給ふを、嬉しきに思ひなせど、あやしく、夢のやうなる事を、心に離るゝ折なき頃にて（一―一一四、傍点引用者）」などとあるように、光を想いつつ、「いとかく、品定まりぬる、身のおぼえならで、過ぎにし親の、御けはひとまれる故郷ながら、たまさかにも、待ちつけたてまつらば（一―一〇五）」、つまり今の境遇に定まる以前ならば、と考える空蝉の思惟は、大君が薫を愛しつつも、「ひと所おはせましかば（四―四〇〇）」、せめて父宮がいて下されば、と考えるのと同じい。ただ、大君の方が、「親の、御けはひとまれる故郷ながら」も親がいないからと薫を拒否する点が、より条件付けが厳しくはあるが。また拒否しつつも、男にうとまれ果てぬようにと気を遣うのも、共通する点といえる。

以上、大君像には空蝉が重ね合わされているとみられる。大君は紫上の苦悩から得た思念のみならず、空蝉の「數ならぬ身（一―九六）」という思念も受け継いでいる。しかしそれは、空蝉のおかれた状況や、体験、光と薫の差異などを等閑視したものであり、大君自身の体験による裏付けがないため、説得力を持てない。つまり、大君はあくまで実体験を持たない「思念の人」として存在してしまっているのである。

第二章　体験する女・中君に関する考察

一

大君の死後、中君の物語が展開するのだが、早蕨巻巻頭で彼女は、

ならび給へりし折は、とりぐ〳〵にて、更に、似給へりとも、見えざりしを、うち忘れては、ふと、それかと、思ゆるまで、かよひ給へる（五―一二）

と述べられている。実際それ以降の中君は、容貌のみならず内面においても、大君との同一性が高いといえる。当初薫よりも匂宮に惹かれていた彼女であるが、次第に匂と比べて、誠実で思慮深い薫の方に、より高い評価を与えるようになる。大君が匂と比較して薫の素晴らしさを感じていたのと同一である。薫の懸想を「さすがに、浅はかにもあらぬ、御心ばへ・有様のあはれを、知らぬにはあらず（五―八五）」に思うが、何とか深くうとまれ果てはしないように拒否するため、浮舟の話題を持ち出すのも、大君が、中君をと薫に告げたのと等しい。これらから解る通り、大君と中君の姉妹は、二人の対比において、或いはおかれた状況の違いによって、それぞれの差異が強調されていたのではあるが、同一の状況におかれた場合、同一の判断、行動をとる、同一人物の分身的関係にあるといえる。元来中君自身にも、大君に薫との結婚を勧められて、「いかにおぼすにかと、心憂くて、一所をのみやは、さて、世に果て給へとは（父宮は）きこえ給ひけん（四―三九九）」といっているように、結婚拒否の意志があったのである。匂宮と結ばれた直後も、より積極的であったのはむしろ大君の方であり、中君本人は、心憂いことと思い、われかの気色をしている。つまり同じように大君も中君も拒否の意志を持っていたのであるが、相手の男性の異同が、拒否の成否を決したといえる。

大君の結婚拒否は、薫が相手であったからこそ、貫徹し得たのであること、贅言を要しまい。では薫以外の男性ならば、どのような結果をみせていたのか。その想定の下展開していくのが、中君・匂宮の物語であり、中君は、大君が「思念の人」であったのに対し、「体験する人」として描かれていることとなる。人物の思念と体験を、二人が別々に受け持っているといえるのではないか。

二

大君の生は、思念が独り歩きしたものであり、理想的男性(8)を拒否し続け、拒否を貫徹するために自ら願って病死していく、といった、現実性の些か薄弱なものであった。それに引き替え中君は、本人の意志と別ではあったが匂宮と結ばれ、宇治から都の匂邸に引き取られ、匂の子を生み、世人から幸福な人物として祝福され、一方で薫の恋慕を賢明に処置し、密通を

回避するなど、匂宮の妻として、現実に対応して生きたといえる。彼女の生き方は、「中君は薫の邪恋などにもよるが匂宮との結婚生活に積極的に取り組んでいくのであって、そこには彼女の明るい聡明さ、自主的に道を求めようとする姿勢がある。」(9)などの評価があるように、当時の女性の現実的な生き方として、一つの理想的な姿ともいえるのではなかろうか。当時の女性の、逼迫した苦しい状況下での生き方を表現するにあたり、女性にとって、薫の如きかなり理想的な男性との婚姻でさえ、苦悩が付き纏わざるを得ないことを描出しようと意図する(10)作者にとって、薫だからこそ拒否した大君の物語は、些か失敗であったといえるであろう。また、女性に簡単に拒否を許す、薫のような特異な人物は、現実にはなかなか存在せず、大君の拒否は、現実に即した女性の生き方としては、実行し難いものである。そこに、中君の薫拒否、浮舟の男性拒否が、繰り返し語られる必要があったのだと思われる。

三

大君物語の結婚拒否は、中君物語・浮舟物語に継承され反復されているのであるが、それは、単に薫が拒否される事実が繰り返される、というだけのことではない。類似した状況が設定され、同様に拒否される姿が語られるのである。

匂宮と夕霧六宮との婚姻によって苦悩する中君は、薫に文を送って邸に呼び、宇治に帰りたいと願う。薫と対面する中君は次の如く叙述される。

まめやかにあはれなる（薫の）御心ばへの、人に似ず物し給ふを、（中君は）見るにつけて、さても、あらましをとばかりは、思ひもやし給ひけむ。なに事も、いはけなき程にしおはせねば、恨めしき人（匂）の御心ばへを、思ひらぶるには、何事も、いとゞ、こよなく思ひ知られ給ふにや、常に、隔て多かるもいとほしく、物を思ひ知らぬ様に、（薫が）おもひ給ふらむなど、（中君は）思ひ給ひて、今日は、御簾のうちに、入れたてまつり給ひて、母屋の御簾に几帳そへて、我は、すこし引き入りて、對面し給へり。（五―七一）

大君が匂宮と比較して、薫の立派さを認め、また、情け知らずと思われぬように対処していたのと、まったく同じである。あまつさえ、自らと薫との婚姻が成立しなかったのを、悔いる如き言辞さえみられる。一方その対面の折、薫が中君との密通を辛うじて自制したのは、中君の懐妊の帯をみたゆえであった。それも大君の喪服の鈍色の袖をみて思い止まったのに対応している。「思ふ事をも、おなじ心に、なつかしう、言ひ合はすべき人のなきまゝには（五―八五、八六）」とあるような、薫の恋慕に対して孤立無援で、相談する相手のない状況も、大君の場合と同一、薫の中君に対する言葉も、

好きがましきやうに、思さるらんと、恥ずかしけれど、あ

るまじき心の、かけても侍らばこそ、目ざましからめ、たゞ、かばかりの程にて、時〳〵、思ふ事をも聞えさせ、うけたまはりなどして、隔てなく、のたまひ通はむを、誰かは咎め出づべき。世の人に似ぬ、心の程は、皆人に、もどかしかるまじくはべるを。猶、後安くを、おもほしたれ

（五―八八、八九）

と大君に対する時とまったく異同がない。

このように大君の薫との結婚拒否が、ほとんどそのまま中君物語に移入され、反復されている。二人の拒否における違いは、ただ結婚か密通か、という点に集約される。それは〝動機〟の問題として捉え直すことができるであろう。中君の薫拒否においては、中君にとっても薫にとっても、〝密通〟であることが、拒否し自制する動機として、明確に機能している。そしてこの動機は、空蝉の光拒否の動機でもあった。空蝉は光との密通の後「常は、いと、すく〳〵しく、心づきなしと、思ひあなづりつる伊豫の方のみ思ひやられて、夢にや見ゆらんと、空おそろしく、つつまし（一―九八、九九）」く感じている。また「品定まりぬる、身のおぼえならで（一―一〇五）」との彼女の心情も、老受領の後妻としての自らの「身の程」を思うと同時に、「人妻」である我が身のことも慮っているのである。先述の如く、大君は「拒否する女」として空蝉の思念を承けている。が、その思念の動機となるべき体験は、このように中君が継承していると思われるのである。先程引用した宿木巻で中君が自邸に薫を呼んだ折、薫が中君の袖を捉え、うちに入って来る時の叙述に「近うさぶらう女房、二人ばかりあれど、すゞろなる男の、うち入り來たるならばこそ、こは、いかなる事ぞとも、まゐり寄らめ（五―七五）」とあるが、これは帚木巻の空蝉と光の密通時の「中將だつ人、來あひたる。（中略）あさましうこは如何なる事ぞと、思ひ惑はるれど、きこえんかたなし。なみ〳〵の人ならばこそ、荒らかにも、引きかなぐらめ（一―九五、九六）」との叙述と、重ねられているように思われる。また、「数ならぬ身」の意識は、中君も再三感じている。そしてそれは、匂宮と六君の婚姻という現実の体験から得たものなのであった。ここでも「思念の人」大君に対して、中君は「体験する人」なのである。

四

匂宮と夕霧六君の婚姻による、中君の不安・苦悩は、女性の生き方として結婚が選択された場合、一般に回避不能なものとして、描かれているようである。中君の心情は次の如く語られる。

中納言の君（薫）の、いまに忘るべき世なく、嘆き渡り給ふめれど、もし、（大君が）世におはせましかば、又、かやうに、おぼす事はありもやせまし。それを、（大君は）いと深う、いかで、さはあらじと、思ひ入り給ひて、とざ

まかうざまに、もて離れん事を思して、かたちをも、變へてむと、し給ひしぞかし。必ず、さる樣にてぞおはせまし。今思ふに、いかに、重りかなる御心掟てならまし。（五―四一）

藤村潔氏の指摘の如く、この中君の心中思惟は、大君の結婚拒否の正当性を印象付けるための、「だめ押し」(11)であると考えられる。彼女が姉君の思慮深さを賛嘆するのは、自分中君と薫の婚姻を勧奨していた姉大君の姉心とは、矛盾するはずであるが、それは要するに、多少の矛盾を犯してまでも読者を納得させようとの、作者の意図ゆえなのであろう。いずれにせよ、北村直子氏の指摘する通り、「中君の心内語は、大君の生前抱いていた不安が現実的に近づいてきていることを呈示するもの」(12)であるとはいえるかもしれない。匂宮と六君の婚姻の背後で、薫と女二宮の結婚話も、同じように進展しているからである。

しかし薫自身は、

昔の人、物し給はましかば、いかにも〳〵、外ざまに、心分けましや。時の帝の御娘を賜ふとも、得たてまつらざらまし。また、さ思ふ人ありと、きこし召しながらは、かゝる事もなからましを。（五―三二三）

と考えている。大君存命ならば自分は女二宮降嫁を拒否したし、帝も自分への降嫁など考えなかったであろう、というのである。若菜上巻における、朱雀院の女三宮の婿選びの折、院、乳母、光源氏揃って、雲居雁の存在ゆえに、夕霧を婿候補から除外していたことを想起すれば、薫の思惟を、弁解だと一方的にきめつける訳にもいくまい。また、中君の薫への評価に〝ゆれ〟がみられることにも、注意せねばなるまい。中君は、先程引用した思惟にもみられるように、或いは「（大君が）おはせましかばと、くちおしう、思ひ出で聞え給へど、それも、わが有樣のやうに、うらやみなく、身を恨むべかりけるかし。（五―一一三）」ともあるように、相手が薫であっても、匂の場合と同樣の結果を招くと予想している。しかし一方では、匂宮に比して、薫の方が一段と立ち勝って、真面目でしおらしい人柄が世に類いない、と考え「故姫君（大君）の、思し掟てしまゝにもあらで、かく、物思はしかるべき方（匂）にしも、かゝりそめけむよ（五―二〇三）」と、つまり姉君の勧め通り薫とむすばれていたら良かった、と思ったりもしている。また、東屋巻においても、

かの君（薫）は、いかなるにかあらむ、怪しきまで、物忘れせず、こ宮（八宮）の、御後の世をさえ、思ひやり深く、後見ありき給ふめる（五―一五四）

などと、浮舟の母中将の君に向かって薫の誠実さを語っている。つまりは、匂と薫の相異、さらに端的にいうならば、大君の結婚拒否貫徹を可能としたことにもみられるような、薫という男の特異性が、問題となってくるのである。作者は、匂も薫も結局は同一である、とここで明言することに、躊躇を感じている

のだと思われる。

五

ところで、大君が紫上の思念を承けていることは、第一章ですでに考察した通りであるが、中君に関してはどうであろうか。はかばかしい後見もない身で男性の心一つ愛情一つを頼りに、正妻格として大切にされてきた女性が、その男性と強大な勢力の後見を持つ高貴な女性との婚姻によって、自己の有りようのはかなさ頼りなさを思い知らされ、苦悩しつつも、表面上は平静を保っておいらかに、賢明に対処しようと努力する—若菜巻での女三宮降嫁に際しての紫上、宿木巻の夕霧六君と匂宮との婚姻の折の中君、この二人の、心情、思惟、態度などを比較しつつ検討していくと、如上のまったく同一の様相が看取される。その文章叙述をつぶさに確認していくならば、明確に両者は対応しており、中君の苦悩は紫上の苦悩を意識した上で描かれていることが解る。しかもそのような苦悩は無視されて世人から「幸人」といわれている点においても同じい。つまり匂・六君の結婚は、六条院への女三宮降嫁の再生であり、紫上の苦悩は中君の苦悩として辿り直されていることになる。大君は紫上のこの苦悩から導かれた思念を継承して、結婚拒否を遂行したと考えられるのであるから、紫上と同じ体験を持つ中君の物語は、大君の拒否の正さを検証し承認している、と判断してよいかとも思われる。しかしその点に関しては、もう少し後にまわすこととして、今一度中君物語と、第二部での紫上物語との対応関係についてみておきたいと思う。

六

中君の苦悩は無論匂と六君の婚姻によるだけでなく、薫のわりなき懸想による密通の危険性も、一方では大きな苦悩の種となっている。先にみた通り、第二部若菜巻と中君物語を対応させると、光＝匂、女三宮＝六君、紫上＝中君の対応関係が理解される。問題となるのは薫の存在である。若菜巻で密通を起こすのは柏木であり、薫はその柏木の子であるのだから、薫は柏木と対応するかのように考えられもする。そして勿論、その対応関係もまったく無視されている訳ではなく、意識されているとは思われるのだが(13)、むしろ紫上＝中君の対応関係を考慮するならば、彼女らと密通を起こすべくありそうな人物は、それぞれ夕霧、薫であり、この二人が対応していると考えた方が良い。二人は同じように「まめ人」と呼ばれ、所謂「色好み」ではない人物、即ち恋愛においてあながちな行為をする若き日の光源氏や、匂宮などとは対照的な人物として描かれている。

若菜巻で起こった柏木・女三宮間の密通は、光源氏・藤壺間の密通の報いとしての面を持つのであるが、作中にもしばしば仄めかされ、光源氏も厳重に注意を払っていた、夕霧・紫上間

の密通の方が、応報としてはより正確―或いは正当―であると考えられる。それを起こさせなかった作者の意図に関しては、種々のことが推察されるであろう。ただ、紫上および夕霧に対応している中君・薫間の密通がぎりぎりのところで回避されているのをみると、おそらくこれは、「可能性の物語の消去」(14)ということになろうかと思う。そのような密通が起こる可能性を一度提示しておいて、それを否定していくのである。実際に密通を起こし得るのは、柏木と女三宮、匂宮と浮舟であり、夕霧・紫上、或いは薫・中君間には、起こり得ない。女性側の適切な処置対応と、男性側の性格―つまり人物の造型からいって、実現の可能性が極度に低いのである。それゆえ薫・中君間の密通が回避された、成立しなかったということは、密通が夕霧・紫上間には生起し得なかったことの確認となっており、それぞれの人物の設定が重視されるべき問題となっているのだといえる。

ここで話を宇治十帖に絞っていうと、先述したように、大君の薫拒否の場面と中君のそれとは、ほぼ同一趣向の反復となっているのであった。そして大君の拒否貫徹や、中君の密通回避が可能となったのには、彼女らの適切な対処と共に、相手が薫であった、という要因が大きく作用している。相手が匂では不可能であったろうという仮定は、中君と匂の婚姻や、匂・浮舟間の密通を考慮すれば、その正しさを承認されるであろう。それは、人物の異同によって物語の展開に差異が生ずることを示唆する。ならば同時に、中君の、匂と六君の婚儀成立によって苦悩する姿が、大君が薫と結ばれていたとしたら、同様の憂苦を感じたであろうことの証明となっている、との想定の有効性を、否定しているともいえる。これまでにもみた通り薫と匂では、その人物造型上の懸隔が明白だからである。

七

以上みてきたように、中君物語が大君の拒否の正当性を実証する、或いは中君が、拒否しなかった場合の大君の不幸を代行している、とみるのは妥当ではない。「思念する人」大君と「体験する人」中君の物語は、結局は、重なり合ってひとつの理論とその実践、という関係にはなり得なかったのだといえる。作者の構想には、中君物語を大君物語の「だめ押し」とする意図があったのであろうが、その目論見は成功を納め得なかったのである。そこに新構想としての浮舟登場の理由の一つがあると思われる。

原初構想での中君の役割りが、なぜ浮舟に肩代わりされねばならなかったのか。吉岡曠氏はその理由として、出自等の人物設定からいって、中君は入水自殺を実行にうつせないであろうこと、薫には中君との密通を敢行し得ないので、薫・匂間の役割り交換が必要であったこと、の二点をあげる(15)。これは妥当な見解である。中君や薫の人物設定上の統一性を、根本から

覆すような物語展開は、宇治十帖の物語論理の崩壊を意味すると、作者も判断したのであろう。人物の基本設定を考慮すれば、中君物語は作中にみられるような結末に達せざるを得ない。ならば、大君の思念は依然正当性を認められていない、ということになろう。それゆえ浮舟物語は、単に原中君物語の代案のみならず、大君物語の修正版としての意味をも持たざるを得ないのである。

第三章　救済なき女・浮舟に関する考察

一

浮舟は、大君中君と同じく八宮の娘ではあるが、母親の身分は低く、継父の身分も常陸守、所謂受領階層である。すでに述べた如く、宇治十帖は中の品の女性の物語であった訳だが、二人の姉達に比べ、浮舟は一層低い身分として設定されており、むしろ彼女の方が、空蝉や初め下の品の女と思われていた夕顔に、より近いことが解る。浮舟物語の方が、さらに中の品の物語としては純粋―或いは正当である、といえるかもしれない。

但し彼女は、大君や中君が空蝉の思念や体験を継承していたのに対し、夕顔型の女性であるといわれる(16)。確かに、浮舟が三条の小屋から薫によって連れ出される場面や、匂宮が浮舟を宇治の住まいから、川を渡った時方の叔父の荘園へといざなう場面などには、夕顔巻の影響が露わである。匂の浮舟への異常ともいえる耽溺も、光の夕顔に対するそれと同一である。浮舟物語が夕顔物語を意識して描かれていることには、疑問の余地があるまい。また物語のみならず、浮舟の人物造型上も、確かに夕顔的な面が多々見出され、光に対する夕顔の態度と、匂に対する浮舟の態度には類同性がある。しかし、浮舟をひとえに夕顔型の女性とのみ、分類してしまう訳にはいかない。空蝉の「数ならぬ身」の意識は、その体験から母・中将の君が、より強く持っているのであるが、入水・蘇生後のことを考えても、やはり浮舟も「拒否する女」としての性向を持つ、と考えざるを得まい。

篠原昭二氏は、朝顔の姫君をめぐっての考察(17)において、紅梅巻の宮君や、朝顔の姫君など「拒否する女」の性格を問題にしている。氏は、これらの女性と住吉物語や落窪物語などの継子譚の女主人公との、類似を指摘するのである。継子譚の女主人公は、元来懸想事に対して冷淡であり、例えば住吉物語においては、継母によって恋の相手を奪われても、姫君本人は別段何ら痛痒を感じていない。むしろ醜聞を流されたりする方を、より強い虐待と受け取っており、そこから結婚拒否へ、さらに出家を希望する、という筋道を辿る。落窪物語でもほぼ同様で、「姫君は、実母の無い事から現世の幸福を諦め、現世の苦難からの解放としての死を望む」(18)のであり、現世の一環としての結婚を忌避している。彼女ら継子譚の女主人公は、継子の不

如意な状態から現世に絶望し、死や出家を願っているのである。篠原氏は、これら「同じ類型の物語群に主人公の性格が共通していた」とし、継母のもとにある、という境遇は、実母即ち行き届いた保護のできる者が存在しない、という境遇におきかえることが可能だとする。朝顔の姫君、紅梅の宮君、そして宇治大君も、そのような境遇にあり、継子譚の女主人公の系統を引く女性だという。

篠原氏の論には首肯させられる点が多いが、実際浮舟も、これら「拒否する女」の系譜上に位置すると思われる。浮舟物語が、継子譚を構想の枠として用いつつ、展開していること(19)を考えれば、それは当然なのかもしれないが、彼女も婚約者・少将を継父常陸守によって奪われても、「なか〳〵、かゝる事どもの出で來たるを、嬉しと思ふ（五―一四九）」ている。さらに、匂邸を逃れ出でて、三条の小屋に寓居するようになっても、「こゝろ安くてなむ。ひたぶるに嬉しからまし世の中にあらぬ所と思はましかば（五―一八三）」と詠ずるなど、現世に何ら期待するところのない様が看取されるのである。

一方宿木巻の、薫が浮舟を初めて垣間見る場面において、彼女は「怪しく、あらはなる心地こそすれ（五―一二一）」という。格子がおろしてあるからそのようなことのあろうはずがない、との女房の言に反して、無論薫は襖の穴から覗いている。浮舟は、「こなたをば、後めたげに思ひて、あなたざまに向きてぞ、添い臥し（五―一二二）」ているのだが、この場面は、そっくり椎本巻巻尾の薫による大君中君姉妹垣間見の場面の反復である。大君も「かの障子は、あらはにもこそあれと、見おこせ給へる用意、うち解けたらぬさまして（四―三七七）」いた。それに対して若い女房が、誰も覗くはずがない、と反論しているのである。初めての垣間見という、物語の重要な局面が、このように大君物語中の垣間見と頗る類似していることから考えても、やはり浮舟も中君がそうであったと同様、大君と同一の人格の分身といい得る一面を持つとみられるのである。

二

薫が三条の仮の宿を訪れ、浮舟を略奪するが如く宇治へ連行しようとする東屋巻の条には、浮舟が「心やすくしも、對面し給はぬを、これかれ、おし出でたり（五一一九〇）」とある。姫君の意に反しての出しゃばりな女房のおせっかいも、大君物語と同趣向なのであるが、大君の時と違って、なぜ薫は女性側の意志を無視して強引に計画を実行にうつせたのであろうか。薫は拒否の果ての死によって大君を失い、中君も自ら匂と結び付けてしまったために手に入れられず、密通も拒否され実行不能である。そのような過去の失敗に鑑みたのでもあろうし、また何よりも、浮舟が、八宮の認知を受けなかった、常陸守の継子という低い身分の存在であったことが大きく作用しているのでもあろう。今問題にしている場面に関しては、前節において

夕顔物語との類似を指摘した。が一方では、光源氏が紀伊守邸で空蝉を自らの寝所へ連れ込む場面や、幼い紫上を北山から奪取する場面との重層も認められる。空蝉は老受領の後妻、当時紫上の実態は孤児同然、いずれもその低い身分ゆえの光の無体な行為である(20)。身分低き浮舟登場の要請は、そのようなところからもあったに違いない。しかし物語の構想面からすると、恐らくは現中君物語の裏返しとして、浮舟物語前半部(21)が形成されているからなのであろう。中君が密通を回避し得たのが、薫という相手ゆえであること、これについては繰り返し述べた。ではもし相手が薫ではなく、匂のような人物であるならば、物語はどんな結末を招来したのであろうか。そのような〝もし〟という仮想を、引き続く物語の展開上に、実際に描き出していこうとする傾向が、宇治十帖の特色の一つとして数えられよう。浮舟という身分低き娘を、強引に自己の意志に従わせようと画策し実行するのは、恐らく人物設定からして、薫の成し得る最低の妥協線上に位置するのであって、もし浮舟が匂と先に契っていたなら、薫が密通を成し得たかどうかは、はなはだ疑問である。しかし薫ではなく匂宮が密通の相手であるので、浮舟は拒否し得ず、密通の成立をみるのであった。これが、中君物語と浮舟物語前半部との相違点である。

大君物語と比較するとどうであろうか。大君が結婚拒否を成し遂げて、何ら男性と性的交渉を持たずに他界したのに対し、浮舟は薫と契り、同時に匂宮とも通じてしまう。そしてそこから、男女間の愛欲の世界の拒否として死が選ばれ、さらに物語後半部では、出家が選択されたのである。つまり浮舟物語にあっては、男性を拒否するまでに具体的体験があり、〝動機〟が明確に存在するがゆえに拒否する、という展開を示す。それゆえ浮舟が男性を拒否する必然性は高く、頗る納得合点のいく帰結となっている。その意味で浮舟物語は、動機なき男性拒否の物語—大君物語の、修正版といえるものである。作者は浮舟物語によって大君物語での失敗の改正を、企図したのではあるまいか。

三

浮舟の拒否は、まず自らの死によって実行されようとした。この点大君の結婚拒否と同様であるが、大君の死が大君を救う、物語にとっての—或いは現実に生きる女性達の問題の、解決となる結論でない(22)のと同じく、浮舟の死も、浮舟にとっての救済・問題の解決とはなり得ないのである。手習巻での浮舟再登場は、作者が死によって遂行される現世拒否、男性拒否を否定していることを示すといってよい。それは尼君の元婿の中将を避けて、大尼君のもとへ逃げ込んだ夜の浮舟の、

いみじき様にて生き返り、人になりて、また、ありし、いろ〳〵の憂きことを、思ひ亂れ、むつかしとも、恐ろしとも、物を思ふよ。死なましかば、これよりも、恐ろしげな

る、物の中にこそは、あらましか（五―三八三）という思惟に、もっとも明確に表れている。浮舟は死を恐れ、死を否定しているのである。

ところで先程、浮舟の男性拒否には、充分な必然性があると述べた。それは間違いではない。但し、浮舟が入水自殺という、平安貴族女性にあるまじき行為を、実行にうつすだけの必然性があったのか、この点は些か問題になるところである。現代の感覚からすれば、彼女の入水にそれ程不自然さを感じることはない。また、浮舟巻における、煩悶する浮舟の内面描写を追跡すれば、作者が入水の必然性・現実性の確保に汲々としていることも解る。しかし、蜻蛉巻での、残された人々の反応をみれば、当時入水がどれ程常軌を逸した行為であったか、理解できよう。右近の、

いみじく、おぼしたる御氣色は、見たてまつり渡れど、かけても、かく、なべてならず、おどろ〳〵しきこと、思し寄らむものとは、見えざりつる、人の御心ざまを。なほ、いかにしつる事にかと、おぼつかなく、いみじ（五―二七八）

とある思惟や、薫の、「いかやうなる、たちまちに、言ひ知らぬ事ありてか、さるわざは、し給はむ。我なん、え信ずまじき（五―三〇一、三〇二）」という言葉などに、それは表れている。また、物怪の事件への関与を呈示して、現実性を高めようとするのも、入水を浮舟自身の決断のみに帰させることに対する、作者の不安の表れであろう。いうまでもなく、当時は貴族女性の入水自殺より、物怪の存在の方が現実的だったのである。無論自殺が未遂に終わり、横川僧都らに助けられて蘇生するという、物語展開上の要請もあろうが、それだけならば、必ずしも物怪の登場を必定とするものでもあるまい。手習巻で現われたこの物怪は、自らが浮舟に憑依し、邸から誘い出したと語るのだが、注目されるのは、同時に、大君を死にいざなったのも自分であると告げていることである。なにゆえ、ここで大君の死が物怪の所業であると、示されなければならないのか。ふたたび大君物語に立ち還って眺めるならば、大君物語の時点においては、明らかに物怪など超自然的な力の介入は、否定されていると確認できる。総角巻では、大君の薫との結婚拒否について「世の人の言ふめる、恐ろしき神ぞ、つきたてまつりたらんと、歯は、うちすきて、愛敬なげに言ひなす（四―四〇六）」女房を、わざわざ登場させ、そのようにいう古女房達の―或いは世間の一般的通念の―俗物性を揶揄的に描きつつ、それに反論することによって、鬼神等の介入を殊更否定している。また同じ総角巻に、大君の病に対して、

祭・祓、よろづに至らぬことなくし給へど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何のしるしも見えず。（四―四五八）

との説明がある。大君の病・死を、彼女自ら選択した、生きている生身の人間の「個」の問題として捉えようとし、やはり超

自然的なものの介入を拒もうとする姿勢がみてとれるであろう。それにもかかわらず、手習巻で、物怪の大君の死への関与が云々されるのは、浮舟の入水自殺と同様で、作者が大君の結婚拒否に、懸命の努力の甲斐もなく、充分な現実性を付与し得なかったためであると考えられる。大君物語は、多くの矛盾点を内包せずには展開され得ず、結果的に結婚拒否の必然性も、大君の死の現実性も得られなかった、謂わば失敗作である。作者は注意深く超自然的存在を排除し、生身の人間達のドラマとして描こうとした努力を、手習巻の物怪の言葉によって、捨て去ろうとしている。作者自身、結局は物怪の仕業とすることによってしか、大君物語に現実性を持たせるのは不可能だと、認めざるを得なかったのであろう。そして、作者が大君物語を或る意味で破棄できたのは、浮舟物語が大君物語のやり直しとして、描かれていったからなのである。

四

大君物語での結婚拒否は、浮舟物語では後半部、浮舟蘇生後にほぼ異同のない形で繰り返されている。但しそこでは、拒否の相手は薫ではなく、小野の尼君の元婿の中将であるが、この中将については、薫との間の顕著な類似性が指摘できる。尼君は、死んだ娘のことよりも、むしろ立派なこの婿が他人になってしまったことの方が、より悲しい、と述懐するが、これはそのまま大君死去後の古女房達が、薫に対して抱いていた感懐と一致する。また、浮舟を願う中将は、尼君に出家願望を語り、道中の難儀をかこち、物思いのある女性に自らの思いを聞いて貰いたいのだ、と告げるが、これもやはり、薫が弁の君や大君に向かって語った内容と、寸分も違わない。さらに、「所につけてこそ、物のあはれもまされ。（中略）おのづから、御心も、通ひぬべきを（五―三八〇）」と、住んでいる所柄・環境から、自分一人で、浮舟の人物像を推量し、造り上げてしまうのも、薫が宇治の土地柄から、勝手に大君を理想化して認識してしまうのと、同一の傾向といえる。尼君は中将について浮舟に「世に、後めたくは、見え給はぬものを（五―三七一）」つまり容易に間違いを犯すような人物ではないから安心だと述べるのであるが、無論それはそのまま、薫への評言でもあった。このように中将は薫型の人物であり、薫の役割りを代行していると考えられる。そして、唯一頼りとする尼君までも、中将との婚姻の成立を望み、浮舟の意を解してくれない、孤立無援で相談する相手もない、苦しい状況も、大君中君両物語に共通して設定されていた、同一の状況であった。以上の如く、浮舟物語においても、大君の結婚拒否と同一の事象が繰り返されている。そして大君と同様、浮舟は中将を拒否するのであるが、ここでは、大君の場合と違い、あれこれと拒否の理由を列挙し、その必然性を訴える必要はない。浮舟が男性を拒否する理由・必然性は、すでに浮舟物語前半部で、彼女の具体的体験を通して、充分に

語られてしまっているからである。

五

ここで浮舟がとった拒否の方法は、出家であった。大君の結婚拒否の時点で提示されていた、二つの方法—死か出家かの二者択一。大君は前者を選び、浮舟もまた、すでに一度、前者を選択している。しかしその方法が否定されたことは、先にみた通りである。女性の生き方として、結婚か結婚拒否か、死によって拒否するか出家によってするか、そういった選択肢を順に選んでは、物語上に、次々と描き出し、確認してきた宇治十帖は、最後に出家による男性拒否へと辿り着いたのだといえようか。

さてでは、死によってなされる拒否が、問題の解決とならなかったのと異なって、出家による拒否は、解決になると認めてよいのであろうか。この点に関しては、はなはだ疑問であるといわざるを得ない。

尼なりとも、かゝる様したらむ人は、うたても思えじなど、中ノ〳〵見所まさりて、心苦しかるべきを、忍びたるさまに、猶、語らひ取りてん（五—四〇〇）

との中将の思考を勘案すれば、作者が出家を絶対的安全地帯と見做している訳ではないことが、明らかだからである。薫の「かの宮（匂）も、きゝつけ給へらんには、必ず、思し出でて、思ひ入りにけん道も、妨げ給ひてんかし（五—四一二）」という心内語も同一の事情を示唆している。一方浮舟自身も、匂宮との情事は否定するが、薫との過去は懐かしく回顧したりしているし（ここで浮舟も、匂と比較し薫を高く評価する、大君中君と同一の傾向をみせる。）、母親や兄弟に対しても強く執着を感じている。また、尼君は「侍らざらん後なん、あはれに、思ひ給へらるべき（五—四〇一）」と、自らの死後の浮舟を心配して涙を流す。横川僧都は、頼もしくも「なにがしが、侍らん限りは、仕うまつりなん（五—三九八）」と、請け合ってくれるが、同時に自らの余命の幾許もなく、「今年・來年、過ぐし難き（五—三九四）」ことを、中宮に告げてもいるのであった。当時世を捨て、出家生活を営もうと考えても、それなりの経済基盤なくしては不可能である。すでに総角巻においても、弁の君が大君に向かって教え諭していた。浮舟の置かれた状況は、依然として脆く、危うい。

ところで、出家による男性拒否は、何も宇治十帖に至って初めて提示された手段なのではない。正篇においてもすでに幾度か繰り返されている。中でも注目しなければならないのは、空蝉の場合であろう。これまでにみてきたように、空蝉物語は、宇治十帖に大きく影響を与えているからである。関屋巻おいて、継子の好色を厭うて、出家した空蝉であったが、彼女には経済的基盤がなく、六条院に引き取られざるを得ない。彼女が物語世界から退場する初音巻には、次のようにある。

かの、あさましかりし、世のふることを、聞き置き給へるなめりと、（空蝉は）はずかしく、かゝるあり様を、御覧じはてらるるよりほかの報いは、いずこにか侍らむとて、まことに、うち泣きぬ。（二―三八八）

あれ程頑なに光源氏を拒否し続けた自らの、彼に頼り、斯様な尼姿を彼の前に晒さざるを得ぬ今の有様を自覚して、空蝉は「まことにうち泣」かずにはおれないのである。胡秀敏氏の指摘する如く、「空蝉の涙には、光源氏に解し得ない無力さ、悔しさといった辛酸な思いが含まれているに違いない」(23)。そして先程みた通り、このような状況に、浮舟とていつ陥るとも知れないのである。

以上いくつかの観点からして、出家とて問題の解決策・救済の手段とはなり難いことが確認できる。それゆえ、夢浮橋巻巻尾が作者の思想の到達点であり、執筆の内的必然性はすべて語り尽くされ、物語は完結しているのだとの意見、これに賛同することには躊躇せざるを得ないのである。女性はいかに生くべきか、いかにして救済され得るのか、答えは何一つとして、提示されていないように思える。

結びにかえて　浮かびたる女たち・蜻蛉巻後半部の考察

一

宇治十帖は女性の生き方について、つまり女性はいかに生くべきか、という課題に対する、一種のシュミレーションなのではないか。第一章から第三章の各所でも述べたように、宇治十帖は、中の品の物語である。特に浮舟物語では、新構想の下、より純度を高めて描き直し始められた、中の品物語であると考えられる。なぜ、女性の生を描出するのに、中の品が選ばれたのであろうか。恐らくは森一郎氏の指摘するように、「身分的に劣位にある中の品の女性（没落の姫君）にこそ女の宿世の命題が深く掘り下げられたからで、女の宿世を命題とする主題との連関による」(24)のであろう。その点からして、蜻蛉巻後半部は興味深い意味を持つ。帚木三帖中には、朝顔の姫君の話題や、葵上・藤壺らの影、六条わたりの貴婦人の叙述などが、散見する。これら上の品の女性は、空蝉・夕顔ら中の品の女性との対比を目的として、描き込まれているといわれる。宇治十帖における女一宮の話題の散見も、同様の事情と理解できるし、原初構想の問題から取り沙汰されることの多い、蜻蛉巻後半部についてもまた、同じであろう。そこから女一宮物語の構想の存在を云々する必要は、ないように思う。かといって、今西祐一郎氏の述べる「宇治十帖が「中の品」の物語に終始すること に対する、作者のうしろめたさが生み出したもの」(25)との意見にも賛意を表し難く感ずるのではあるが。

二

当時の「女の宿世」というものを考えるとき、それは無論、中の品の女性のみの問題ではない。上の品の女性とて、帚木巻で空蝉について発せられた、「女の宿世は、いと浮かびたるなん、あはれに侍る（一―九十二）」という言辞にみえる如き現実の状況に、何ら変わりはない。蜻蛉巻後半部は、そのことを示していると考えられる。式部卿の宮の姫は、父宮の死去に伴い、東宮や薫にとの父宮の意志と掛け離れ、女一宮の女房として出仕することになってしまう。父親が帝にと志していた空蝉が、老伊予介に嫁す、という程度ではないにせよ、確かに薫が「はかなき、世の衰へ（五―三二六）」と嘆ずるような、あわれな境遇であるには違いない。また、薫の、女一宮に関する次の心中思惟も、興味を引く。

わがはゝ宮（女三宮）も、おとり給ふべき人かは。后腹と聞ゆばかりの隔てこそあれ、帝ノ〳〵の、おぼしかしづきたるさま、異事ならざりけるを。猶、このあたりは、いと、殊なりけるこそ、怪しけれ。明石の浦は、心憎かりける所かな（五―三三三）

ここで些か唐突に、〝明石〟という地名が出てくることに、注目せねばならない。宇治十帖中他に例をみないこの地名の、不自然な登場は、なにゆえであろうか。無論薫は、女一宮が明石中宮腹であるゆえに、この地名を出したのだ。明石中宮の母は明石上、辺境の地明石に閑居の日々を送っていた身分低い、所謂中の品の女性であった。つまり、薫をはじめとする世間一般が上の上の女性と考え、憧憬する女一宮も、実は元をただせば低い身分の女を出自とする、という事実、この事実を端なくも薫の思惟中の〝明石〟の一言が暴きたててしまっているのである。彼女もまた、式部卿の宮の姫君とは逆の方向で、女性の立つ地盤の、決して堅牢ならざる事実を証している。さらに穿った読みを許されるなら、今ここで薫が問題としている母・女三宮は、かつてその身分の高貴さゆえに、紫上の煩悶を導き出した、その当人である。一方の女一宮―その母・明石中宮は、実母・明石上の身分低きがゆえに、その紫上のもとで、養女として養育されていたのであった。明石上とは、自らの低い「身の程」ゆえに苦悶しつつも、程に従って賢明に生きた女性の、代表といえるであろう。このような、古今の「身の程」の上下のあやにくな関係が、薫の心内の何げない、無意識の語句を契機として、浮かび上がってくるのではあるまいか。

三

いずれにしても、女の宿世は「浮かびたる」もの、定めなきものである。宇治十帖は、中の品の物語として、その認識を形象化している。そしてそれは、中の品によって全女性の有りようを代表させているだけのことであり、上の品の女性においても、その生の不安定さに、些かの異同もある訳ではない。蜻蛉

巻後半部は、そのことを示しているといえる。換言すれば、蜻蛉巻後半部は、中の品の女性を主人公に女性の生のはかなさ頼りなさを描出する、宇治三姉妹の物語を、女性一般に普遍化させる意味を持つのである。そのはかない生を、女はいかに生きるべきか、その問いに対する答えは、示されぬままであるけれども。

注

(1)拙稿「宇治大君論序説」(『詞林』六号、平成元年一〇月)

(2)藤村潔「右近と侍従—橋姫物語と浮舟物語の交渉—」(『国語と国文学』三五巻九号、昭和三三年九月)、吉岡曠「宇治十帖の構想」(『国語と国文学』四三巻一号、昭和四一年一月)等参照。

(3)注1に同じ。

(4)本稿での『源氏物語』本文の引用は、すべて岩波書店日本古典文学大系に依る。但し、「」『』()及び振り仮名は省略し、適宜()に入れて主体或いは対象等の人物を示した。本文引用後の()内の数字は、古典文学大系での巻数及び頁数を示す。

(5)今西祐一郎「「宇治十帖」管見」(森一郎編『日本文学研究大成　源氏物語Ⅰ』国書刊行会昭和六三年発行)に詳しい。

(6)注5前掲論文。

(7)後世の源氏読者がそう呼ぶのみならず、作者自身作中で使用している(初音巻二—三八七)。但し「帚木」の呼称も使用している(関屋巻二—一六三)。

(8)源氏物語以後の物語類の男性主人公が、多く薫型の人間であることや、『無名草子』などの評言から、薫が当時の理想的男性像に極めて近似していたと解る。

(9)森一郎「宇治の大君と中君」(『源氏物語作中人物論』笠間書院昭和五四年発行)

(10)藤村潔「宇治十帖の世界」(注5前掲書)

(11)藤村潔「源氏物語の物怪について」(『源氏物語の研究』桜楓社昭和五五年発行)

(12)北村直子「「源氏物語」宇治の大君の世界—不安の論理—」(『学大国文』二九号、昭和六一年三月)

(13)柏木は光の女三宮に対する、薫は匂の中君に対する、それぞれの扱いが不当であるとして、自己の恋慕を正当化しようとする傾向がみられる。また、柏木が落葉宮を得てなお飽かず女三宮を求めたことと、薫が女二宮を得て女一宮をさらに慕うこととが対応している。

(14)鷲山茂雄『源氏物語主題論』(塙書房昭和六〇年発行)

(15)吉岡曠「中君の都移り」(秋山虔・木村正中・清水好子

編『講座源氏物語の世界』第八集、有斐閣昭和五八年発行）

（16）増田繁夫「空蝉と夕顔―処世のかしこさとつたなさ―」（源氏物語探求会編『源氏物語の探求』第五輯、風間書房昭和五五年発行）

（17）篠原昭二「結婚拒否の物語序説―朝顔の姫君をめぐって―」（『日本文学研究資料叢書　源氏物語Ⅳ』有精堂昭和五七年発行）

（18）注17に同じ。

（19）宇治十帖と継子譚の関係については別稿にて考察の予定。

（20）胡秀敏「紫上に投影された空蝉像」（大阪大学『語文』五六号、平成三年五月刊行予定）

（21）ここでは大まかに、浮舟入水前を前半部、入水後を後半部と呼ぶこととする。

（22）武原弘「宇治十帖研究序説―大君の人物像をどう把握するか―」（梅光女学院大学『国文学研究』四号、昭和四三年一〇月）や、北村直子注12前掲論文等参照。

（23）注20に同じ。

（24）森一郎注5前掲書解説。

（25）注5前掲論文。

（わたらい・あつゆき　本学大学院博士前期課程）